

## 古典に基づく人生の心得

大阪大学名誉教授 長谷川 晃

### はじめに：

文明らしきものが現れ始めたのは紀元前1千年ほどの頃だろう。しかし、面白いことに紀元前5世紀頃に、世界各地に天才が出現し、その影響は現在に至るまで極めて大きく、その作品は今なお世界の人々に新鮮な人生教訓として愛読され、受け継がれている。釈迦牟尼、ソクラテス、老子、孔子、それに、少し遅れて、キリスト、がその代表である。また古典として今なお影響の大きなものは旧約聖書、仏典、老子の道徳教、それに儒教だろう。その後2千年以上に渡り、科学以外の分野での基本的な文明の進化はほとんどない。

私は宗教家ではないので宗教に関する話をするのはできない。一方、哲学は論理的に物を考える学問だが、その中の唯物論は近代科学がその御株を奪うことになり、唯心論は宗教には勝てない、ために、人生に対する影響力を失っているように思われる。現代人の人生にとり、今尚新鮮さを持ってアピールする力をもつのは、老子の道徳経と孔子の論語だろう。その中でも老子はその著書、道徳教81章の各所で一貫して素晴らしい「人」の生き方を示してくれている（注：道徳は熟語としての道徳ではなく、老子の説く道と徳を表す）。道徳教と儒教は十数年前から京都のレストランキエフにおける毎月一回の「月読み会」で参加者とともに熟読してきた。今回は、基電会での挨拶の依頼を受けたのを機に、これから社会に出て活躍される若い人たち、それに不惑の歳を過ぎて後の人生をどう全うしようかと思案している方々の参考になる話を老子の思想や孔子の言葉を借りて書いてみることにする。

### 1. 老子と孔子について

ここで取り上げる老子(Lao Tzu)と孔子(Confucius)については多くの書物があり興味のあるひとはそれらを参考にさせていただくといい。ここではこれらの人物の紹介ではなく、考え方を中心に紹介し、其を参考にしてほしいと思っている。老子は本名を老聃(ろうたん)といい、紀元前4世紀頃の人であるとされている。孔子と違い老子は弟子を取らず、孤高の人で、自作とされている「道徳教-Tao Te Ching」を残してどこにもなく立ち去ったと言われている。著作の「道徳教」も、後に手が加えられた箇所があるようで、全て老聃のものではないかもしれない。しかし、老子81章を読むと、一貫した思想が明白

に伝わってくる。それは自然、即ち、「おのづからしかり」の教えを「道」とし、手を加えないあるがままのものを尊し、とするものである。そして何より、この思想は彼のオリジナルのものと思われ、他の古典を引用するものではない。さらに日本人の心と共通するものに「母」とか母性的なものに重きを置く。老子81章の各所に「母」とか女性を讃える文が見えるが「父」や父性を引用する箇所は見当たらない。

一方、孔子の論語(Analects)は孔子の言葉を弟子たちが紹介する形をとっているもので、孔子の直接の著作ではない。孔子自身も各所で言及するように当時すでに古典と言われる中国思想を重要視する。しかし、どの古典のどの思想を選ぶかは孔子の判断で、その意味では論語に表されている孔子の言葉には一貫性があり、孔子の思想が現れている。特に老子と対照的に孔子は「父」や父性社会を代表する思想家であると言える。論語で親と言えは父を意味するし、母という言葉は見当たらない。実際論語の中でよく使われる「女、なんじと読む」は上から下に向かっている言葉で男尊女卑を表している。

私はこの二人の考え方の基本にあるものは老子が「自然の中での人間」を主題としているのに対し、孔子は「人間社会の中での人間」の生き方を主題として考えていると思っている。現代人にとってこのどちらも大事なものでこのことを承知の上で参考にするといい。

日本人にとり、紀元前5世紀頃までのほぼ一万年の間は縄文時代と呼ばれ、人は自然の中で暮らしていた。老子の思想はこの時代の生活様式そのものを反映するものと見ることができる。実際老子の持つ母性崇拜思想は日本の縄文時代を彷彿とさせるもので、この時代の土偶のほとんどが女神像であることと一致する。また、老子が理想郷としている第80章の「小国寡民」は縄文日本のことを表していると思えることができる。縄文時代で代表される人間関係を私は個人人間社会と呼んでいる。その後の弥生時代には、稲作を中心とした農耕時代に入るが、世界的に見てもこの時代には人は大規模な集団生活を始める事になり、自ずから大地主や統治者を中心とする階級的組織社会を作ることとなる。この時代を私は組織人間社会と呼んでいる。孔子の思想はこの組織人間社会での社会人の生き方を中心としたものだ。我々の生きている現在は統治者を選ばず民主主義社会となったため、

個人人間社会と組織人間社会が共存していて、どちらの側面も有し、結果、老子的な考えも孔子的な考えも重要となる。これらのことを頭に置いて老子と論語を眺めてみよう。

## 2. 老子の言葉

ここで私は道徳教と論語を解説するのがその目的としているわけではない。老子の文の中で私が「これは人生の教訓になる」と思うものを抜粋し、私なりに消化してみなさんの参考にしていただきたいと思っている。とは言え、「老子」を感じてもらうにはやはりその第1章に目を通してもらうことから始めねばなるまい。しかし、この文、なかなか難解で初めて読む人には消化しきれないものが残るに違いない。このためにその原文、和訳、そして英訳を併記して解説しよう。

### 老子上篇 第1章

原文：

**道可道、非常道、名可名、非常名、無名、天地之始、有名、万物之母、故常無欲、以觀其妙、常有欲、以觀其微、此兩者、同出而異名、同謂之玄、玄之又玄、衆妙乃門、**

和訳：小川環樹（中央公論社世界の名著昭和52年出版）  
道の道（い）う可（べき）は、常の道に非ず。名の名づく可は、常の名に非ず。名無きは、天地の始めにして、名有るは、万物の母なり。故（まこと）に「常に欲無きもの、以て其の妙を觀、常に欲有るもの、以て其の微（きょう）を觀る」。この兩（ふたつ）の者は、同じきより出たるも而も名を異にす。同じきものは之を玄と謂う、玄の又玄、衆妙の門なり。

英訳：Gia-Fu Feng and Jane English (Vintage Books, New York, 1972)

Tao that can be told is not the eternal Tao.  
The name that can be named is not the eternal name.  
The nameless is the beginning of heaven and earth.  
The named is the mother of ten thousand things.  
Ever desireless, one can see the mystery.  
Ever desiring, one can see the manifestations.  
These two spring from the same source but differ in name; this appears as darkness.  
Darkness within darkness. The gate to all mystery.

これらの三つの文を比べながら私なりの訳を記してみよう。

「道を「道」という言葉で言ってしまうとその瞬間にそれは本来の道ではなくなる。私は「道」という言葉で自然の摂理、人間の生き様などを表したいのだが、これを「道」

という言葉で言ってしまうとその本来の意味を失ってしまう。実際天地の始まりには名はなかった、名付け親は万物の母だ。そのものとそれを表す言葉には大きな違いがあることを知ってほしい。欲があると（目が眩んで、言葉にとらわれて）物事の本質を見失うが、欲がなければ物事のその微妙な本質を見ることが出来る。人間、言葉や知識にとらわれない物事の本質を常々見抜く力を蓄えねばならない

と言った具合だろう。「道」という字を「言う」と読ませるのは無理のようだが、中国語では今も道を動詞で神が言うとか、自然の道理を言うとかの意味に使っているので無理な読みではない。老子はこの第1章で、まず自分が言いたいことは言葉では言い表せないことを断っている。言葉を使用したらその瞬間に本来の意味で無くなることを断っているので、読者は後の80章の内容を理解する上に常にこのことを念頭に置いて読み進まねばならない。実際みなさんも自分の頭の中での言語辞書とそれが意味する本来のものとの違いを意識しながら日常生活を送っているのではないだろうか。この考えは後に禅宗で不立文字などの言葉で仏教の教えを悟るための根幹として使われている。

しかし、ただ、黙っていたのでは何も伝えることができない、それで老子はポツリポツリと話し始める。老子は「有」は「無」がその前にあるから意味を持つとか、柔は剛に打ち勝つとか一貫して母性文明とその背後にある妙の世界を強調する。

ここで目を孔子に移してその考えを紹介しよう。

## 3. 論語

孔子は組織人間社会での理想的な生き方をする人間を「君子」と呼び、それ以外の一般庶民を「小人」と呼ぶ。孔子が多く例を挙げて模範像として示している君子の生き方は今なおみなさんの参考になるだろう。論語を理解する手始めに孔子の描く理想の人間像をいくつか紹介しよう。

卷第七、子路第十三に、

**子曰、君子和而不同、小人同而不和、**

和訳：子曰く、君子は和して同ぜず、小人は同じて和せず。

Arthur Wiley氏による英訳：

The Master said, The true gentleman is conciliatory but not accommodating, Common people are accommodating but not conciliatory.

君子は「和」を重んじるが、付和雷同はしない、小人はそ

の逆で付和雷同はするがケンカばかりしている。というのが、Wiley氏は「和」するを“conciliatory”という語を使って解釈している。これは融和的に行動するということを表す語である。一方‘accommodating’は原理原則を簡単に押し曲げて人と同調することを意味する。うまい訳である。また、君子の英訳は‘gentleman’を、小人の英訳には‘common people’を使っているのはいい英語の勉強になる。と同時に原文の意味を和訳より正確に伝えてくれる。和訳では君子をそのまま使うので、日常使わない君子の意味を曖昧にってしまう。こうしたことが論語にしる、老子にしる、和訳をわかりにくくしている。日本語では漢文をそのまま使いがちだが、紀元前500年の漢文の意味は変化しているのにそのまま現代語として使うと問題を引き起こす。君子という言葉がいい例で、和文でわかったような気がするが、英語のgentlemanの和訳は紳士だから、君子と言わずに紳士と訳したらどうだろう。曖昧な君子より、紳士の方が現代的でびったりとくるが、値打ちがないような気もする。英訳での解釈をあえて添えているのはこうした和訳の持つ曖昧さを払拭するためである。君子(紳士)は自分をしっかり持っていて、その上で「和」を大事にする、「和」とは人と簡単に同調するものではないと、言っているのは、興味深い。日本文化の伝統に「和」を大切にすることがあるが、うっかりするとこれを小人の「和」と思っている人が多いのではないだろうか？

次に、顔淵(がんえん)十六を紹介しよう。

卷第十二、顔淵(がんえん)十六に

**子曰、君子成人之美、不成人之惡。小人反是、**

和訳：

子曰く、君子は人の美を成し、人の悪を成さず。小人は是に反す。

Wiley氏の英訳：

The Master said, The gentleman calls attention to the good points in others; he does not call attention to their defects. The small man does just the reverse of this.

‘成す’をcall attention toと訳しているのは興味深い。英訳で原文の意味がはっきりする、つまり、君子は人の長所に注目し、小人はこれに反し、人の短所ばかりを探すという意味になる。人との付き合いに置いて常に注意したいものだ。

卷第八、衛霊公二十一にも同様な表現がある、

**子曰、君子求諸己、小人求諸人、**

和訳：子曰く、君子は諸(これ)を己(おのれ)に求む、小人は諸を人に求む。

Wiley氏の英訳：

The Master said “The demands that a gentleman makes are upon himself; those that a small man makes are upon others.”

己に厳しく、他人には寛大であれ、また、己の犯した間違いや欠陥を他人のせいにするな、と言っている。論語にはこうして人間の理想像を君子と小人という言葉を使って対比的に表している箇所が沢山ある。こうした表現は理想像を紹介する上に非常に有効で分かりやすい。人の生き方をこうした君子像を使って表現する以外に多くの興味ある表現も幾多ある。ここでよく知られている為政四を紹介しよう。

卷第一為政四

**子曰、吾十有五而志乎学、三十而立、四十而不惑、五十而知天命、六十而耳順、七十而從心所欲、不踰矩。**

和訳：

子曰く、吾れ十有五にして学に志(こころざ)す。三十にして立つ。四十にして惑わず。五十にして天命を知る。六十にして耳順(したが)う。七十にして心の欲する所に従って、矩(のり)を踰(こ)えず。

英訳：

The Master said, At fifteen, I set my heart upon learning. At thirty, I had planted my feet firm upon the ground. At forty, I no longer suffered from perplexities. At fifty, I knew what were the bidding of Heaven. At sixty, I heard them with docile ear. At seventy, I could follow the dictates of my own heart; for what I desired no longer overstepped the boundary of right.

この文章はよく耳にするものだが、やはり、英語を読むと懇切丁寧に説明してくれているのがわかる。フランス語はもっとそうだが、日本語に比べ、英語での表現は曖昧さを残さず、嫌という程詳しく翻訳している。例えば、立つは英語でstandだがこれだけでは意味が曖昧である。しかし、これをplant my feet firm upon the groundと書くと、しっかりの大地に足を押し付ける、すなわち自分の行き方をしっかりと持つという意味になり、「三十にして立つ」の意味が明白になる。

多くの人にとり30歳というのは大学を出て仕事を持ち、持ち場での自分の役目がはっきりと見えてくる頃である。またそうでないと困る。30歳にもなって、フリーターで

何をしたらいいかわからず、うろうろするようではその後の人生が見えてこない。孔子は15歳で学に志ざし、つまり、勉強を頑張るやろうと決めたわけだが、その後の15年で自分の2本の足でちゃんと立つところまで行けたと言っている。この辺りまではみなさんの多くが経験することであろう。面白いのはその後である。

「四十にして惑わず」はよく聞く言葉で、みなさんをご存知だろう。40歳は不惑の年と言われるが、実は多くの人にとりこの頃は迷いが増大する年である。実際英語でもこの頃をidentity crisisと呼び、自己の自己たるべき存在に疑問を持ち、今までがむしゃらにやってきたが、「これで良かったのだろうか」と人生を振り返り、これからの人生をどう生きるか、これで良かったのか、など、自問自答を繰り返す時期である。また、こうした迷いがなければ人生意味はない。私は、孔子の言う四十而不惑は孔子先生もやはりidentity crisisに陥り、これを克服したことを明記したいとして書いた言葉と思っている。それでないこの文章に意味がない。

さて問題はその次の「天命を知る」である。天命を知るというのは自分の生き方に迷いがなくなったことを自覚するとも取れる。それでは、四十にして「惑わず」とどこが違うのだろうか。同じ事の繰り返しではないか？ 私自身、不惑の歳を乗り越え、自分の人生を振り返り、科学者としていい仕事をしてきた、これでよかった、これが天命だったのではないかと、思うようになっていた。この疑問を携えて、四十代の後半頃からよく訪ねて行って教えを乞うていた大徳寺龍光院の小堀南嶺老師を尋ねた。老師は直ぐに明快な答えを与えてくれた。それはこうである。四十で迷いから解放されたら、自信を持ってその思いを人のために使うことだと。私は、未熟であったことを自覚させられ、フーンと目の前が明るくなった。人生の後半は世のため人のために尽くすことだと、遅まきながら自覚することができたのだ。和尚は続けて、不惑の歳を乗り越えなければ、これを行う資格はない、老害になるだけだと。今50半ばで社長業をしている長男にこの話をしたら、「天命を知る」の意味をすでに自覚していたので、なかなかやるなと驚いたが、この意味に気がつかなかったのは私が人より未熟だったからかもしれない。松下幸之助の有名な言葉に、企業の生み出す利益は世の中への貢献度の現れだ、と言うのががあるが、これも「天命を知る」の一つの見方だろう。なんとなく自覚していてもはっきりと自覚しないと行動には移せない。

南嶺和尚の話聞いて間もなく、ベル研究所での研究職を辞め、大学に戻ることにし、幸い故熊谷総長のお誘いもあり、大阪大学での教育に携わることになった。おかげで大変幸せな五十代以降の人生を送ることができた。

さて、ここで老子に戻ってみよう。老子81章の最終章に、「道道非常道」で始まる老子の結論とも取れる面白い

文章がある。これを紹介しよう。

老子下篇 第81章

**信言不美、美言不信。善者不辨、辨者不善。知者不博、博者不知。聖人不積、既以爲人、己愈有、既以與人、己愈多。天之道、利而不害、聖人之道、爲而不爭。**

和訳

信言は美ならず、美言は信ならず。善なる者は辨せず、辨ずる者は善ならず、知る者は博からず、博きものは知らず、聖人は積まず、既（ことごと）く以て人の爲にして、己（おの）れ愈（いよいよ）有り、既く以て人に與（あた）えて、己れ愈多し。天の道は、利して害せず、聖人の道は、爲して争わず。

英訳

Truthful words are not beautiful, beautiful words are not truthful. Good men do not argue, those who argue are not good. Those who know are not learned, the learned do not know.

The sage never tries to store things up. The more he does for others, the more he has. The more he gives to others, the greater his abundance. The Tao of heaven is pointed but does not harm. The tao of the sage is work without effort.

私がこの文でみなさんの生き様の基本となる考えを紹介し、ぜひ参考にさせていただきたいと思っている。特に若い人に知者不博、博者不知を理解し記憶してほしい。物事の本質を知るということは「物知り」になることではない、また、「物知り」は物事の本質を知らないということこの老子の言葉は私が常に若い人たちに伝えてきた言葉である。いわば東大生にはなるなということでもある。また、後半は年配者に対する教訓としていつも引用する文である。ものを溜め込まず、与えてしまえ、与える事によって却って豊かになるのだと言っていることは誠に妙を得た言葉である。このような考えが紀元前5世紀に作られたことは実に感慨深い。今なお新鮮に聞こえるではないか。この章の後半の意味するところは論語の知天命に通じる。

結言

今回は中国の古典の中から、老子と孔子の残した文を参考に人としての生き方を紹介した。紀元前5世紀のこれらの偉人の言葉は今尚新鮮なものとして通用する。そればかりか、彼らの言葉が今尚必要とされていることが痛感される。実際、これらの偉人を生み出した本国、中国の現代指導者に是非読んでもらいたいものだ。

(通信 昭和32年卒 34年修士)